

聞き取り記録

神西湖におけるウナギについての聞き書き

曾田一志¹・石田健次¹

The nature and aquaculture of Japanese eel, *Anguilla japonica*, in Lake Jinzai, Shimane Prefecture, Japan: an interview note

Kazushi SOTA and Kenji ISHIDA

キーワード：ウナギ，神西湖，聞き書き

はじめに

神西湖は島根県東部に位置し(図 1),面積 1.35km²,周囲 5.3km,平均水深約 1.1 mの小型の汽水湖である¹⁾。ここでは,ニホンウナギやヤマトシジミを対象とした漁業が盛んに行われ,また県内漁業権河川に対してはウナギの放流用種苗の供給基地としての役割を果たしてきた(図 2)。しかし,ニホンウナギについては,資源および生態についての情報不足により環境省のレッドリストに絶滅危惧 I B 類に指定されるなど,種の存続が危ぶまれている。神西湖においても漁獲量の急減のために種苗出荷事業の休止を余儀なくされている。しかしながら,神西湖におけるウナギ(生活史,漁業)については一般的な生態に関する記述が僅かに見られるものの殆ど見当

たらない¹⁾。本聞き取り調査は神西湖で長らく漁業に携わって来た田中正人氏に,神西湖におけるウナギ漁業や,氏が若いころ取り組んだウナギ養殖について,詳しく話を伺い,基礎的な資料としてまとめることを目的とした。

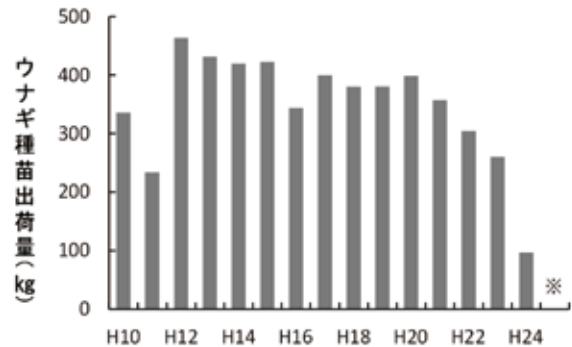


図 2. 神西湖におけるウナギ放流種苗出荷量の推移
※平成 25 年以降は事業取り止めにより出荷無し

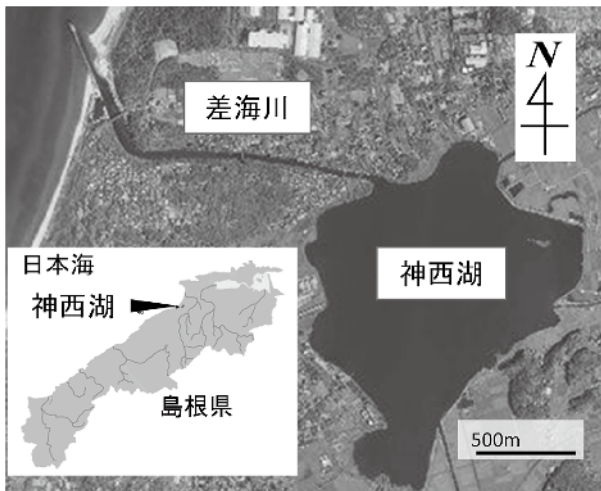


図 1. 神西湖および差海川

田中正人(たなか まさと)氏プロフィール

昭和 18 年生まれ。祖父から引き継いだ鮮魚店を経営する傍ら,神西湖において,まず網漁,シジミ漁,ウナギ延縄漁などを営み,昭和 40 年代には,県内でいち早くウナギ養殖にも取り組んだ。また,平成 15 ~ 24 年まで神西湖漁業協同組合の代表理事組合長を務めた。

聞き取りの方法

聞き取りは平成 25 年 12 月 15 日に,神西湖漁業協同組合事務室で田中正人氏に筆者等が直接行い,同組合参事の浅津昭彦氏が同席した。聞き書きのため,

¹ 内水面浅海部 Inland Water Fisheries and Coastal Fisheries Division

田中氏の了解を得て、ICレコーダーによる録音を行った。文字起こしの際、表現等は極力忠実に再現したが、わかりにくい方言等については通常表記に変更し、不明な点については後日、確認のための聞き取りを行った。聞き取り結果は概要としてまとめ、引用した問答の番号を文末に記載した。また、問答全文を巻末に掲載した。

神西湖のウナギについて聞き取り結果の概要

(1) シラスウナギの遡上生態 (図3)

- ・シラスウナギは3～5月にかけて遡上し、盛期は4月～5月である (問答4)。
- ・遡上は夕方から夜9時前後まで行われ、岸伝いに遡上してくる (問答33, 38, 39)。
- ・単独で遡上することもあれば、群れで遡上することもある (問答33)。
- ・堰などの遡上阻害要因があると滞留する (問答41)。

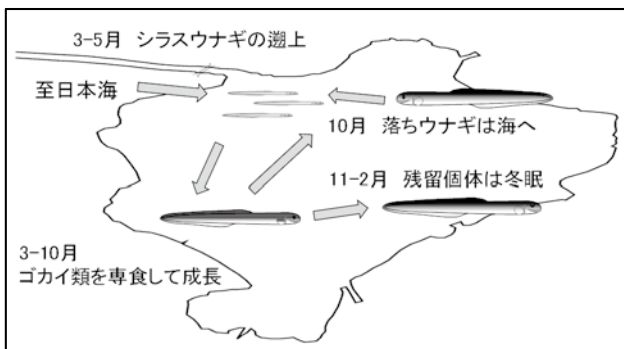


図3. 聞き取りから推定された神西湖におけるニホンウナギの生活史

(2) ウナギの活動 (季節的, 日周的な) 変化 (図3)

- ・水温が低い時期 (11月～翌年2月頃) は泥場で潜ってじっとしている (問答26)。
- ・春 (3月～4月) に水温が上昇してくると、ウナギは活動を始める。かつてはシラウオの刺し網に小型のウナギが沢山かかることもあった (問答26)。
- ・神西湖の流入河川 (十間川ほか) にも遡上するが多くはない (問答68)。
- ・水が少しでもあればウナギは遡上していく (問答30)。
- ・8月～9月中旬にかけて水温が30℃を超えると、ウナギの活動が鈍り、ます網には入らなくなる (問答76)。
- ・7月～8月の上げ潮時に神西湖と差海川の間を行ったり来たりするウナギが見られる (問答

74, 75)。

- ・体色が銀色に変化したウナギは6月～8月にかけて見られる (問答71, 72)。
- ・10月に入るとます網に下りウナギが入る。量的には銀ウナギの半分程度で、全てが下りウナギになるわけではない (問答76)。
- ・ウナギの活動時間帯は夕方～夜9時位までが活発であり、それ以降から翌朝まではあまり活動しない (問答33, 34)。

(3) ウナギの食性と成長 (図4)

- ・ゴカイを中心に摂餌している。まれに小型のアミ類も食べている。沢山ウナギの腹を捌いたがヤマトシジミを食べているウナギは見られない (問答64, 65)。
- ・神西湖に遡上してきたシラスウナギは、その年の秋頃には体重で100倍 (約10～20g)、全長で鉛筆の半分位 (約15cm前後) に成長する。2年目の秋には全長30cm近くに成長する (問答25, 26)。

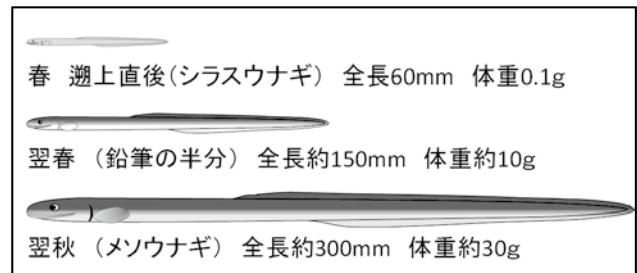


図4. 聞き取りから推定された神西湖におけるニホンウナギの初期成長

(4) 神西湖における漁業種類とウナギ漁業 (図5)

- ・ます網の統数は昔から6統と決まっていた (問答46)。
- ・以前はウナギ搔きが盛んだったが、現在は行われていない (問答81)。
- ・ます網の主な対象魚種はウナギ、モロゲエビ (ヨシエビ), カワエビ (スジエビ, テナガエビ類) である (問答77, 80)。



図5. ます網

- ・神西湖でヤマトシジミ漁が盛んになったのは昭和50年頃から（問答62）。
- ・ます網の漁獲量は以前の1/3以下に減少した（問答47）。
- ・ウナギ資源の減少の一番の原因は養殖用種苗の捕り過ぎだと思う（問答30,31）。

(5) ウナギ養殖（図6）

- ・昭和40年頃から昭和55年まで行った。当時、島根県にはウナギ養殖の事例がなく、岡山県に視察に行って技術を学んだ（問答2,14,15,16）。
- ・養殖用種苗は岡山県児島から買ったもののほか、特別採捕許可を取得して県内河川で捕ったシラスウナギを使用した（問答2,3,4,5）。
- ・家の裏に100坪のコンクリート池を用意し、2年～3年かけて成鰻まで仕立てて出荷していた。飼育水は地下水を汲み上げて使用し、無加温だった（問答8,9,12,16,23）。
- ・種苗の池入れから出荷までの歩留まりは90%だった（問答10）。
- ・疾病等の発生は無かったが、養殖池にヘドロが溜まったので廃業した（問答2,16）。
- ・島根県では昭和30年代、40年代は天然ウナギが主体で、養殖ウナギは珍しく、販売単価は天然物で1kgあたり800円、養殖物で1,000円であった（問答6,18,19,20,53）。



図6. 養殖池跡の一部（現在は網繕い場として活用）

(6) 聞き取りを終えて

田中氏1人からの聞き取りではあるが、氏は長年神西湖で主にウナギ漁業に携わって来たことから、その証言の信頼度は高く、ウナギの生活史等の調査研究にとって大変参考になると考えられた。また島根県におけるウナギ養殖について、実体験に基づく記録証言が得られた。

聞き取り記録の全文

[水産技術センター]：島根県はウナギ養殖や漁業についての知見が少なく、神西湖のウナギ漁の記録を残しておきたいと思い企画しました。本日はよろしくをお願いします。

[問答1]

Q：今年（平25年）は小型のウナギが多かったと聞きましたが？

A：昨年（平24年）から種ウナギの出荷（放流用種苗出荷事業）を行っていない。ここ数年並の量の小型ウナギを（出荷せずに）皆が神西湖に戻したためで、今年が特別多かったわけでは無いだろう。ます網でも分かる。居れば多少入るが、それが見えなかった。量が下がってきているのは間違いない。

[問答2]

Q：養殖はいつからですか？

A：昭和40～55年まで、家の前で行っていた。100坪で。無加温、露天の止水池で。15年位やっていた。そのときのウナギの種苗は、まだ県から特別採捕許可（以下、特採）をもらっていなかったの、岡山の子島、灘崎、三上さんという養殖業者からもらってやっていた。100kg位だったかな。毎年。46年か47年に当時の漁政課にいつて許可もらってやった。漁業権のある河川、神西湖や江川では捕れないので、漁業権の無いところ、堀川、田儀川、小田川、静間川、それだけ行きよった。それで、大概シラスウナギ（図7）を1kg位捕ってね、それで自家生産をしよった。それが昭和45、6年か47、8年、定かでないが。それで52年位までやった。52年で止めたのはね、採捕と種を岡山から入れるのを止めた。（池に）残った分で55年までやった。それは、結局ヘドロがたまって、家の池の方に。家の周りでやっていたからヘドロを処分するところがなくて。結局これが限界だなということで、それで止めたですかね。



図7. シラスウナギ（全長59.5mm 体重0.13g
2014年2月27日湖陵漁港で採集）

[問答 3]

Q：特採で捕られたシラスウナギと岡山の種苗とで養殖をやっていたのですか？

A：そうです。

[問答 4]

Q：特採のシラスウナギは捕れるときはどれくらい捕れたのですか？

A：1kg～1.5kg位。それくらい捕れたらもう止めよったけどね、それはね、4月のだいたい時期が遅くなってからだけね、4月のはじめ位からね5月の中ごろまでだったかな、その1ヶ月の間、毎晩毎晩は行ってないけどね、時化たり何だりで様子を見ながらだけけどね、1kg捕るまでに半月くらい掛かったかな。1kgでだいたい6,000匹位だけね。色がつく（クロコ）までの当たり前のシラスで、それくらい。

[問答 5]

Q：岡山の業者から買うのに1kgどれ位ですか？

A：当時ね、昭和40年代はね、1kgが3,000円位だったかな、思い出せんが。1kgが100本だ。大きくて、餌付けがしてあるもん、1年間ね。シラスで捕るでしょう、その業者もシラス業者から買うだけ、中間育成業者から1年間確実に餌についたものを買って帰るから、高いわね。1kg100匹ということで買った。いちいち数えるわけではないけれど大体がそんなもの。素人ではないで、確かそうだった。

[問答 6]

Q：養殖したウナギはどちらに出荷していたのですか？

A：それは出雲の市内で。その頃の3,40年代はね、ウナギといえば天然で、養殖って言ったらね、「養殖！？」という時代でね。まだ、養殖がこれからという、そういう時代だ。だから、養殖というものにまだ馴染みがない時代だ。色を見たら天然物と養殖物全然違うだけ、うわーやっぱり養殖だの一ちゃんな時代、今はもう養殖物で、ウナギはこんなものと思われているけど。

[問答 7]

Q：池で飼っておられる時、餌は何をやっていたのですか？

A：餌は「養鰻」というウナギ用の配合飼料を使っただ。練ったら団子みたいな、鳥餅みたいに粘るつか、餅みたいな団子になって。池に投げて給餌器にいれてもポーと溶けて拡がったってロスばかり出て話にならなだけ、ウナギが噛んで初めてちぎれるように、次に魚油オイルを混ぜて練って、それを大きい網の中に入れて、水面に浸かるように吊って

おいたカゴの中に入れて、もう登り付いて食べに来るけん。だけん、水の中で食べらへんけん。もうとにかく登り付いて水から上にあがって、こうやって噛みきって、一口わて噛んだら水の中にはいる。もう競争で来るけん。豚の子が乳を吸う時みたいにチュチュ、チュチュあーゆう音がするけん。そらあものすごい。競争が厳しい。

[問答 8]

Q：年間の出荷量はどの位だったのですか？

A：その時にはね、昔は（飼育は）2年がかりだけね。結局温度もかけないし、半年ほどしか餌を食わなだけね。結局、もう冬は動かんでしょ、11月頃から餌やられんだけん。4月位にならないと餌やられんだけん。半年飼って、半年冬眠みたいな格好だけ、（種苗を）100kg位入れよったけん、その中で6～7割くらいか、出荷が。あとの3割は3年位かかる。種を入れて、1シーズン飼って、その次の年の土用の丑の日ぐらいに、6割7割出荷して、あとの3割は次の年に出す。結局いっぺんに大きくならないので、とぎれとぎれで出す。だから同じように養殖を始めてから完全に出荷できるまで2年から3年かかるといふことだ。

[問答 9]

Q：6～7割を2年で仕立てて、残りの3割を3年で仕立てるといふことですか？

A：そういうことそういうこと。

[問答 10]

Q：歩留まりはどれ位だったのですか？

A：歩留まりは良かった。100%は行かないけど、まあ90%くらいかな。

[問答 11]

Q：病気などで大量に死んだとかは無かったですか？

A：病気では無かった。酸欠で殺したことがある。昼は酸素かけんで良いんだ、水車は。夜ね、たまたま体調が悪くてね、水車のスイッチを入れることを忘れとって、そうやったらその日に限って今の南西風でね、蒸し暑い風だった。朝見たらみんなウナギがブカブカ浮いてるだけ、それからあわててやったが結局手遅れで、約半分か4割位死んだかな。あのときはショックだった。

[問答 12]

Q：飼育できる場所があったのですか？

A：うちの前が畑だったけん、それを掘って、ブロックを据えて（池を造った）その名残がちょんぼ残るとる。だどもほとんど埋めてしまった。

[問答 13]

Q：すごいですね、経験もないのに、そんなお金をかけて？

A：神西湖の漁をやっとして、大きい祖父さんが、まあ、神西湖で捕るばかりだなくて養殖をやってみいやと言って。

[問答 14]

Q：そういう知識や情報や他県からの事例とかあったんですか？

A：いや、全くない。そういう情報も何だい、養殖もやっとするもんがおらんもん。やっとするもんがおつて、止めたという話は聞いたけども。

[問答 15]

Q：やりかたも知らなかったのですか？

A：うん、だから岡山のほうの養殖場に行って勉強して、どんな風なやり方して、飼ってるとか。

[問答 16]

Q：視察はされたんですか？

A：行くことは行ったよ。やるからには、池作るのに結構（お金が）かかったよ、ちょっとしたプール作るみたいなもんだけね。150万円位かかったか、池代だけで。当時は150万ぐらい言ったら、家が1軒建ちよった。いや、ホントだよ。100万でちょっとした家が建つぐらいの時代だもん。施設したり何だりで、結構（お金が）かかったけん。（養殖を）15年ぐらいして、もう元は取ったけん、まあ駄目でやめただ無いけん。ただヘドロがたまって止めた（廃業した）だけん。

[問答 17]

Q：当時のウナギの出荷金額はいくらぐらいだったんですか。種を池入れして、2年から3年かけて9割方出荷してお金に換えられるという話だったんですけど。だいたい出荷サイズが1本が何グラムぐらいだったんですか？

A：1本がだいたい200グラムぐらい。あのころは今よりね、小さいやつだったけん。4本から5本もんで1kg出しようだったけん。だけん200～250グラムぐらい。だけどね最低でもそれぐらい以上だないと、結局小さいやつを出荷したって、結局目方だけね、それからすると歩留まりから計算するとね…

[問答 18]

Q：いくらぐらいですか？

A：いくらぐらいかなあ、あのころはねえ、天然ものでkg単価800円ぐらいだったかな、養殖で1,000円ぐらいだったかな。

[問答 19]

Q：養殖の方が高かったんですか？

A：あの一、高かったよ、高かった、高かった。それはね何故かゆうとね、天然物はね捕れる時期だないと捕れんし、それから注文したって捕れんということだってあるし、安定した漁が無い。あの当時、捕れるときにはポッと捕れて、料理屋が要るときに、いやウナギが今捕れんで無いて言ったって。養殖は、（ウナギを）5本でも10本でも料理屋さんが欲しい言われてから竹筒を（池に）入れて、それからきれいな水のなかで食ったもんを吐かかして、それから絞めて出すやつだけん。

[問答 20]

Q：出雲の市内で料理屋さん向けにですか？

A：そうそう、だから料理屋さんも、天然物ばかりやっとして、ほかに代用品もないだけん。養殖ウナギだ言たててウナギに変わらないだけん。泥吐かきして、絞めて出すだけん、次第に料理屋さんも様子がわかってきたとって。最初の頃は「あ、養殖か」といって、家の内で育てたやつで、「天然物には勝てんわな」といってあまり喜ばれなかった。そんな時代だった。それが徐々に浸透しだして、まあ、お客さんに出しても天然物だったて、養殖だったてわからん。後から「養殖だったかや、天然と思つとったに」ちやな話もあった。

[問答 21]

Q：天然物と養殖物とわかるもんですか

A：わかるわかる。色が全然違う。天然物はね（背中）は黄色掛かった緑、腹は黄色掛かった白だが、養殖は白い。灰色掛かった色の白さ。天然物と養殖ものとは色はねなんぼでも見分けがつく。素人でも見分けがつく。養殖ばかり見ていたら「ウナギはこんな色か」と思って、たまに天然物をみたら「天然はこんな色か」と思うかもしれん。もう全然違う。

[問答 22]

Q：今でもそうですか（養殖ものの色質改善は進んでないのか）？

A：養殖物は天然物の色に近づくことは絶対無い。それはもう、水から違うだもの。

[問答 23]

Q：養殖に使っていた水は？

A：地下水をくみ上げて使っていた。

[問答 24]

Q：神西湖の放流用ウナギ種苗出荷事業はいつ頃から始められたのですか？

A：それはよくわからん。昭和40年代、50年代、60年代まではね、神西湖のシラスというものはね、かなり上がりよった。30年代、40年代というのは

子供心にも覚えているが、今の県内の河川の放流用には全部神西湖の組合が出荷していた。それぐらい捕れとった。シラスも入っていたし、結局、宍道湖や中海のようにだだっ広くなくて、神西湖は小さくて浅い。浅いところでウナギは育つし、それから捕りやすい。そんなこんなで大量に捕れとったもんだと思うよ。

[問答 25]

Q：種苗で出荷していたサイズは

A：ウナギが、シラスが豊富に捕れとった頃はね、小さい奴は鉛筆、いやいや鉛筆よりまだまだ小さい、ほんとに最高の、極上の種苗だ。鉛筆の半分位かな。春、シラスが上がるでしょ、シラスが上がって、8月、9月頃になったら鉛筆の半分位になる。シラスの色が変わってクロコになって、次の年の春ね、100倍になるけん。100倍といったら（全長が）鉛筆の半分だ。目方で100倍。

[問答 26]

Q：シラスが遡上して翌年の春、重量が100倍になるということですか。

A：それぐらいのサイズが種苗で出荷するサイズにかなり入っている。入って1年目と2年目が一緒になって出荷される。だから2年目のやつは結構大きい。それでも30cm未満かな。ものすごく（神西湖にシラスが）入ってきよったもん。シラウオの刺し網、2月、3月にやるけどね、宍道湖は12月から1月位だったかと思うけど、シラウオの刺し網に3月か4月頃、水温が高くなるとね、（小型ウナギが）シラウオの刺し網の小さい目にもたれかかって、水温が上がると（冬の間）砂や泥に潜っとったやつが上がって出て活動するようになるわね。そうするとシラウオの刺し網の目の中に頭を刺して、宙ぶらりんでタラーっと垂れとうだ。そうすると網上げの時逃げるやつも居るし、そのまま、家に帰ってシラウオを外すときにズルズルはい回るやつもいる。それ位のウナギが刺し網に頭を刺して5匹10匹20匹、多いときには50（匹）から上。あれだけ振ってぶって網洗いながらあげとるのになというぐらい、ああいうものに目を刺してというか、ウナギが休んどったちゅうか、家持って帰った時にそれだけウナギが居るといことは相当な数が居たということだ。近年、そういうことは無いもん。

[問答 27]

Q：それだけウナギがようけ居ったということですかね？

A：神西湖というのはウナギの養殖場みたいなもん

だった。だから面積は小さくてもそれ以上のウナギが遡上しとったということ。

[問答 28]

Q：神西湖のどこが良かったんですかね？

A：結局、ウナギの生育に適した環境だったということだわね。だから松江のウナギ問屋は神西湖のウナギをメインにして扱ったもんだわね。最近なんか特にだわね。全体に少なくなった中で、神西湖でも少なくなって。多い時でも結構な（神西湖産の）引きがあったのに。

[問答 29]

Q：なんで捕れなくなったんですか？

A：結局、シラスの遡上が悪い（減った）。

[問答 30]

Q：平成22年に差海川堰（塩分調整堰、図8）が出来たがその影響は？

A：あれは関係ない。あげなもんは関係ない。ウナギは船の航路ほど開いとったら十分。（シラスウナギは）夜上がってくるやつだけ。あれを閉め切って完全に淡水化しとれば別だが、ウナギばかりはある程度上流の山の堤とか谷川の池みたいなものでも、濡れておりさえすれば上がる習性があるだけ。ウナギほどはもう、魔物みたいな魚だ。差海川の調整堰なんて、まだ2年や3年のもんだけん、あれやなんか関係ない。まあとにかく海から入ってくるシラスが居らんということだ。シラスが入とったら神西湖も昔の漁があるはずだ。だから特別採捕の種苗出荷も今年から止めた。（捕れていれば）止める理由なんかないわね。それで、わしの今までの経験から言うと、それはね、養殖業者、昔はね、今の家らがやとった、自分が勉強してやった止水池で温度も何にもかけずに天然と同じややり方で、半年餌やって半年潜って。今は、もう加温して1年間、シラスから飼っても1年で大きくして2年で出荷するようなサイクルでしょ。1年中温度かけて、餌やって早く太らせて出すでしょ。まあそれほど経費も掛かっているが、今そのやり方でやって大量に飼うでしょ、止水池だったら入れられる量は決まるとるだけ。無理に入れたら（病気や大量へい死の）危険性がものすごく高くなるだけ。養殖やったらもう、温度かけて、腹いっぱい食わせて、それなりに酸素供給やってやればまったく事故は無いもの。そうすると昔の養殖の何十倍の量のシラスを飼える、確保する、シラスは捕れる、養殖業者はドンドンドンドン池に入れる。そうすると、鶏が先か卵が先かみたいなあれで、かつては270トンぐらいシラスを捕っ

ていたのが、今では5トンなわけだから、小さいうちに捕ってれば親ウナギが居なくなるのはホントだわね。だから一番悪いのは養殖業者だ。特別採捕で許可ほど出してドンドンドン捕らして、まあわしは神西湖で天然物を相手にしとるのよ。天然物を漁師が捕るのは知れたもんだわね、捕れたり捕れんだったり。シラスの乱獲が一番(の原因)だわね。12月にはもうシラス漁がはじまるとははずだわ。



図8 差海川堰(奥が上流, 神西湖に至る)

[問答 31]

Q: 今年こちらで調査を行っていて、山口県でも同じ調査をやっています。今年山口県の日本海側で初めて捕れたのが5月だということで、こっち(山陰)に来ているのはもっと遅いかもかもしれませんね。昔と比べるとズレているというか、逆に言うと全体が下がっていて、この辺に来るのは最後の最後というか染みだしてきたみたいなやつなのではないでしょうか?

A: 残りもんか〜。結局シラスの捕りすぎだわね、その規制がないもの。やっぱり、親ウナギだってマリアナの方へ行って産卵するわけだども、秋の落ちウナギになって、その親ウナギ自体が少なくなれば、自ずから減るわね。そういうサイクルだ。なんでも一緒だ。そうだと思うよ。

[問答 32]

Q: シラスの捕り方ですが、以前、カーバイト等の灯りで照らしてへろへろ泳いでいるのを、網戸のお化けみたいなので捕られると聞きましたが?

A: 網戸のお化けみたいな奴じゃないの。あのね、団扇があるでしょ。団扇ぐらいの網で十分だけん。あまり早く泳ぐ魚じゃないけん。その当時から車のバッテリー12ボルト用の40~60wのライトがあるが、40wだったら一晩位持つ。60wだと6~7時間位で無くなってしまう。バッテリーの明かりで湖面や川面を照らすと、明りの所へツーツーツと浮いてくる。そうするとなんぼ白くて透明でも分かる。そうしたらツツツツとこうして(掬う仕草をしながら)、ずーっと逃げるもんだないけん、明りがついてれば

プワプワ浮いてるけん、だけん、なんぼでも掬われるけん。明りに浮いてきたのを。それで、吉井川あたり(著者注:岡山県)でやっとなるかね、今の大きい明りで、大きい馬鹿でかい網でザッザッザと掬いばなしでやっとなるけん。浮いて来る間が無いけん。河口の海だけん。波もあれば濁りもあって見えないけん。そうすると大きい三角ダモみたいなやつで、こうして底を這わしてザーッと掬うだ。ウナギの子はヌルヌルとすぐ分かるけん、小さい杓子みたいなもので掬っては活かしの中に入れて、それが本式の取り方だけん。こっちでやったのはバッテリーの明かりで浮いてきたやつだけ捕る、まあ優しい獲り方だったわな。

[問答 33]

Q: 金魚すくいみたいなやり方ですか?

A: そうそう。ま、金魚すくいだわな。捕れるときには5, 6匹位10匹位いっぺんに捕れるときもあるけん。連れで歩いているときもあるけん。たまに1匹とか2匹とか。まーあ、なんぼ見とつてもあがらんあがらんという時もある。時間時期もあるけんね。あのね、夕方日が暮れてから間なしが一番厄介。手元がちょっと暗くなって、周りが薄暗くなって、それで暗くなって、電気つける時間帯から、6時7時に日が暮れるようになったらね、4月いったら日が暮れるのは7時半頃かな。太陽が沈んで30分位たった頃からね、手元やっぱり明りつけらな分からんていうときに明りつけたら分かりだすけん。それで夜9時位までだけん。せいぜい9時位まで。それを過ぎると朝まで待ってても、夜明かしたほどの甲斐は無い。上がる時間帯は大概決まってるけん。同じように夜が明けるまでダラダラ入ってくるわけではない。それは何の漁もそう。神西湖の漁はそげだけん。網漁も、ます網を漬けてるでしょ、そうするとね、午後9時、10時頃の夜中に1度網を揚げて、朝も揚げたらやっぱり入ってるかという、ほとんど入ってない。何の魚でも。

[問答 34]

Q: 夕暮れとともに動き出すということですか?

A: そうそう、日が暮れだして活動が始まって、ある程度活動開始から時間が経ったら活動終わり。動かん。だいたい魚の習性はそうだ。だから昔は「一の暗ん、二の暗ん」だ言って。一番最初の夕方が一の暗ん、二の暗んというのは夜中の12時、1時位、その頃にはウナギや他の魚の活動は鈍ってくるだけけん。

[問答 35]

Q：一の暗んが一番良い？

田：うんうん、そう。うなぎ釣りなんかも一緒だ、魚釣りの。

[問答 36]

Q：潮の具合や天候とか流れとか濁りとか関係ありますか？

A：それはね、やっぱり天候だね、潮の差引（干満）。

[問答 37]

Q：太平洋側では新月の大潮の夜、下げ止まりから満潮前の2時間位が良いと聞きますが？

A：それは多分あってる。

[問答 38]

Q：潮は出ても、入っても捕れるんですか

A：うん、捕れる。それはね川の真ん中の方で明りをつけて掬う方法でないから、川の護岸に居って、護岸に寄ってきたやつを掬う方法だけ。流れの流芯に居って、流れの強いところで掬う分でないけん。潮がどんどん流れても、縁のほうだからそんなに抵抗はない。

[問答 39]

Q：（シラスウナギは）縁伝いに来る？

A：縁伝いに上がってくるもん。

[問答 40]

Q：流芯の方はどうですか。上がってきますか。捕れるんですか？

A：結構入ってくると思うよ。

[問答 41]

Q：やったことありますか？

A：いや無い。護岸ばかりでやっている。一番条件のいい所は田儀の川だ。海近くに堰堤があるでしょ、橋を渡ってその堰堤の西側で。あそこが一番すくいやすかった。アユの稚魚も同じ時期だからたくさん堰を飛んでいた。自分はウナギが目的だからアユには目もくれなかったが。その当時は稚アユも、海産アユがものすごかった。（著者注：魚道が無いため溜まりやすい）近所の人もタモで掬っていたもんだ。

[問答 42]

Q：ほかに捕りやすいところはありますか？

A：いや、無い。田儀川が条件が一番良い。今は分からんよ。シラスも少なくなっただし、条件が変わったかもしれんが。神西湖は調整堰ができて、航路ができて、今の港側から降りて、調整堰があるでしょ、航路は流れがきついので、あれの上のほうか、もうちょっと橋（木橋）のある流れの緩いところか。まあ、風が吹いたときには分かり難いかな。でも、あそこだったら間違いなく姿が見える。それと、（大社の）

堀川は分かり難い。一番下流のところで捕るのだけど、結構、遊漁船が泊まって、夜昼ひっきりなしに出入りするの、波立って（水面に）落ち着きが無い。あそこよりは田儀川や調整堰のところが良い。

[問答 43]

Q：シラスウナギは岸沿いに上がるという習性があるとのことで、調整堰近辺の水辺で調査を行っている。航路のあたりは下げ潮時と上げ潮時には川のように流れて集魚灯も落ち着かないのですが？

A：ずっと上流に上がるだわ。堰のところはとてもダメだわ。潮が入るときは良いけれど、下げるときは（流れが早くて）とてもダメだわ。

[問答 44]

Q：まず網は代々やっておられたんですか？

A：代々やっていた。

[問答 45]

Q：まず網の目合は

A：13節（約1cm）

[問答 46]

Q：一番多いときには何統やっておられたんですか。

A：神西湖全部で6統という決まりがある。それで6人やっていて、一人が1統ずつやっていた。数は変わってない。

[問答 47]

Q：漁獲量はどれ位ですか？

A：昔と比べたら半分か1/3の水揚げだ。今の3統が昔の1統分だ。それでもまだ昔の1統の方が多い。

[問答 48]

Q：出荷する時には畜養して腹の中の物を出して、締めて殺して出すのですか？

A：1週間ぐらい畜養して腹の中の物を出してから活魚で出す。ほとんどが活鰻で出荷する分だから。

[問答 49]

Q：1週間畜養するんですか？

A：1週間は畜養しないと、水が汚れて輸送（中に死んでしまって）できない。食べたものが腹の中にあるとね、弱ってしまうから。

[問答 50]

Q：ウナギ養殖は事業としては良かったですか？

A：ウナギ養殖は商売としては酸欠で殺さずに順調にやれば餌代引いて、経費雑費引いても、家族でやるほどの設備ではないので、1人でやれば十分の規模だ。

[問答 51]

Q：年間100万円位の利益でしたか？

A：まあ、それぐらいは。神西湖でも毎日毎日漁に

出て同じようにウナギが捕れれば養殖なんてしなかったかもしれないが、ウナギの時期にウナギの商売をやったものだから、客が要るときに限ってないもんだから。そうすると養殖でもやったら、というのが一番最初の発想だ。そうしたらそれ以上の成果だった。故障もなしに。ただ、ヘドロが溜まってボコボコとガスが出て、硫化水素とかでは無いかもしれないが、やっぱり水が悪くてね、止水池だから。透明の水ではダメ。窒素分を足してでもアオコを作るから。(ウナギは)警戒心が強いから、アオコを湧かして透明度が無いほんとにアオコの水にしてないと警戒心が和らがない。透明だと人の姿を見たら養殖でもすぐ隠れる。それで止水池でもアオコの液を作る。ハウスかけてやったらそんな物は関係ない。温度かけて餌やればどんどん大きくなる。だから、普通の、露天でやるのと止水池でやるのと、ハウスかけてやるのとでは水質が違う。宍道湖のアオコじゃないよ。今、それにこだわった養殖業者は居ないでしょう。採算が合わないもの。

[問答 52]

Q: 神西湖で出荷されるときに問屋さんが取りに来られるそうですが、どこの問屋さんですか？

A: 松江か宍道。県内。他所に出すほど無い。玉造や松江の温泉とか。まあ松江がメインだ。

[問答 53]

Q: 今の話は現在の出荷のはなしで養殖では無いですよ？

A: 40年代、50年代は養殖物の流通が無かった。浜名湖だ何だと言ったって、出雲の方には入っていないもの。問屋が少し入れていた程度。まだそうゆう流通時代じゃないもの。50年代には「ラピタ」(出雲市にあるJA直営スーパー)でウナギの丑の日に実演に行ったり、「ホック」(現在の100円ショップ「ダイソー」の場所にあったスーパー)にウナギ焼きに行ったり、ご飯といっしょに。ウナギの蒲焼き、養殖ウナギ持って。大田の「サンノア」にも行った。出雲にも「加藤」という川魚屋があったけどね、そこもやっていた。だからそこがやって、うちがやって、出雲ではウナギの蒲焼きはそこと家よか無かったもの。それが一番元祖だ。それで当時は養殖ウナギの活魚ね、生きたやつを捌いて、それを実演で焼いていた。その時代から今度冷凍物が入ってくるようになる、それで単価が合わなくなった。だからうちらが出雲のウナギの蒲焼きの元祖だ。出雲の大きい旅館や料亭、温泉にも持って行きよった。とにかくこっち(出雲周辺)は全部うちが一手に引き受け

ていた。養殖物で。

[問答 54]

Q: そのときもます網で漁はしておられたんですよね？

A: やっていた。

[問答 55]

Q: ます網でウナギが捕れる時期というのは暖かい時期だけですか。

A: ウナギの6月の解禁から10月位までだね。水温が下がりだしたら下りウナギになってそれでしまいだ。小さいやつがおってももう活動しなくなる。だからまだまだ来年の春の漁で入る奴も神西湖の中にはおるはずだ。絶対量はどれだけおるか、それはかなり数が減ってきている。さっきいたみたいにシラスが上がってこないのに、それと、生息環境が変わってきているからね。

[問答 56]

Q: 神西湖で一番ウナギが多いところは？

A: それはなんとも言われない。とにかく条件の良いところ良いところに向けて移動するものだから。

[問答 57]

Q: ヨシの生え際に小型ウナギがよくいるとか聞かれますか？

A: それはどこが良いかというのはね、ウナギもある程度集団で動くから、1匹や2匹単独で動くという習性じゃないので。やっぱり条件の良いところは酸素ばかりでは無い、餌気のあるところとか、そういう所で行動が変わってくる。

[問答 58]

Q: やはり濁っていた方が良いのですか？

A: そうともなんとも言わんけどな。濁れば良いというものでも無い。だから狭い神西湖でも水の条件の良いところを移動するわけだから。北が良かったり、南が良かったり、その時の風の作用。風が吹いたときにはある程度風下、西風が吹いたら東がある程度漁があったり、ある程度波立つとゴカイなんぞが浮き上がってくるから。アミエビみたいなエビも餌にしているけど、ゴカイがほとんどの餌だからね。風で波立って濁りが入ると、それについてゴカイも浮いてくるから、それを食べに(ウナギも動くので)、移動範囲や行動範囲が変わってくるんだ。

[問答 59]

Q: ここは小型が多いから止めとこうとかいうのは無いですか？

A: そうだ。大きいのだろうが、小さいのだろうがそれは天候具合、気象条件によって行動が変わって

くる。まあ、生息環境は厳しくなっているわね、神西湖も。結局、昔の神西湖の中心部、湖岸部のシジミが居るような所ばかりでなしに、沖合でも昔は泥だったのでそういうところに潜っていたが、今はヘドロだから酸素もないし、何にもないからなかなか、底のヘドロの中でどれぐらい越冬するもんか、そこの所は分からないけれども。だから、延縄なんかが一番よく分かる。昔は自分も延縄やっていたから。ミミズ付けてね。そうすると神西湖の中心の方だろうが3月中頃から延縄するとまだ泥の中に潜っているから。そうするとウナギがね、ドベがついたまま上がるんだ。グッ、ググーッと、ひっかかったかなーと思うと、もう穴の中に潜っている。根掛りしているのと、ウナギが掛かっているのとの違いは分かる。手の感触で。こうしてやると、すーっと抜けるんだ。ウナギも尻尾に力があるから。踏ん張ったような格好すると抜け上がらんが、こうして2、3回引くとスーッと上がってくる。ドベがついたままで。昔はそういうふうで、神西湖の全体にウナギが潜って冬眠していたが、今ヘドロだからどれだけ潜っているか。酸素が無いような所で潜って、頭ほど出しておれば呼吸ができるかもしれないが、完全に潜っていたらとても、酸素があるような状態じゃないし。シジミの居るような砂場に潜る奴が居たが、全部シジミ漁場になっているそう。ウナギも落ちて潜ることができない。いろんな条件が重なっている。どこどこでどれだけ多く冬眠しているか、ちょっとそこの所は読めなくなった。

[問答 60]

Q：ウナギやシラスが盛んにとれていた頃と比べて、シジミ漁師は増えましたか。

A：その当時はあまりシジミが世に出てない（売れなかった）。まだウナギが捕れていた頃から徐々にシジミの漁師が増えだして。それでもまだ休む場所とか漁でも皆が掻き立てる場所に隙間があった。今は操業日だったら隙間がないぐらいに（シジミ漁師が）立つからね。

[問答 61]

Q：ウナギも昼寝できない？

A：ウナギでいえばそういう状況にはなったかな。

[問答 62]

Q：シジミを皆さんとりだしたのはいつ頃ですか？

A：シジミが金になり出したのは昭和50年。大々的に捕り出してね。金になり出した。それまではほんに限られた頭数の人間しか獲らなかった。金になりだしてから組合員もどんどん捕りだした。

[問答 63]

Q：以前からシジミ漁師は居たんですか

A：居るには居たよ、自分もその一人だ。

[問答 64]

Q：ウナギはシジミを食べますか？

A：さあなあ、ウナギがシジミを食べてるところを見たことが無い。いくら捌いても、シジミを潰して餌にしてかごの中に入れてやるとウナギが入りよったが、やあ食べてるわ、シジミを食べてるというような感覚は今まで無いけどな。コイはなんぼでもシジミ食べるけど。コイほどシジミを食うやつはおらん。それがね、ウナギがね、ゴカイはたくさん食べている。ほかのエビなんかを食べてるやつは見たことが無い。

[問答 65]

Q：ゴカイだけですか。

A：ゴカイだけ。

[問答 66]

Q：それは一週間位畜養したやつを見て思われたのですか

A：いやいや、捕ってすぐのやつを見て。分かるから、腹がすごく膨らんでいるから。餌を食べてるか食べてないかすぐ分かるから。餌を食べてるやつはゴカイを食べているからだけれども、腹が太いから。そういうのを出したら（出荷したら）すぐ死んでしまう。弱って。だから食べたものをしっかり吐かして初めて、1週間でも10日でも持つ。

[問答 67]

Q：神西湖は結構ヨシが生えてますが、昔からですか？

A：昔から。今は少なくなった方だ(図9)。昔はもう、ヨシがぎっしり生えていた。今はヨシの間に隙間があるが、昔はもうヨシの密植だった。



図9. 神西湖のヨシ群落

[問答 68]

Q：川の中で捕られる漁師さんはおられますか？

A：川の中で漁をする者はおらん。漁をするほどの

川でないもの。雨が降ったときに、その辺の橋の上から釣るとか聞いたことがある。昔はこの辺で釣りしたりしよったがね。今はウナギ釣るような川じゃ無い。水もないし。

[問答 69]

Q: そうするとほとんど海から神西湖に入ってきたウナギは神西湖や差海川に留まるということですか?

A: 差海川の中には結構居るね。だけんど十間川とか各河川に全く上がらないことはない。多少なりとも上がっているのではないかね、どれぐらいかは分からないが。上がるのは上がってるわね。

[問答 70]

Q: 餌がそれだけ豊富だったら居心地が良いですね。そんなに急いであっちに行かなくてもというのがあってしょうか?

A: 水がちよっと少ないとはいうものの、まだその上流域へ上がってるわね。うんうん。それだからある程度の下りウナギが降りてくる。

[問答 71]

Q: ます網に下りウナギ、良く銀ウナギとか言いますけど。あれが入り出す時期というのは何月ぐらいからですか?

A: 6月から8月までの水温が高いときだ。

[問答 72]

Q: その時期がきたから銀ウナギになると言うよりも、もうその年に下るウナギは最初から銀ウナギになっていると言うことですか?

A: うーん、色の加減とか細かいことは分からんけどね、変わってくるのは変わってくるね。小さくても色が黒くなってくるもの。下りウナギの色になってくる。中には銀ウナギのきれいな色した奴も居るけど、それは本当にわずかだ。

[問答 73]

Q: 水温が下がり出すと銀ウナギは入らなくなるのですか?

A: 9月一杯までかな、10月になったら水温が下がり出すから。

[問答 74]

Q: 以前、差海川を下りウナギが行ったり来たりバタバタするとおっしゃってたのを覚えているのですが、それは何月ぐらいですか?

A: それは下りウナギの時期じゃなしにね、それは神西湖と差海川の河口の方とを行き来する分、それは下りじゃない。それは7、月8月位。夏場。

[問答 75]

Q: 差海川の湖陵の港ぐらいですか?

A: それは潮が下がる時には見えないよ。入るときだったら分かるけど。浅いところでね。

[問答 76]

Q: 10月に黒いウナギが入るのですか?

A: 10月に入ると本当に下りウナギの姿したやつだ。だけど9月、10月に捕れたウナギが全部下りじゃないからね。水温が下がりだして色が変わってきたなっていうのが、半々ぐらいかな。ます網といっても水温がね、上がる前6月、7月ぐらいのまだ水温が30℃になるかならないかぐらいの時期までは多少ウナギも入るが、30℃を超えて湯みたいになったらあまり活動しない。今は特に温暖化になって遅くまで暖かいので、8月から9月位まではほとんど休漁状態。それで今度水温が下がりだして、ほかのザルものと一緒に活動し出すのが9月半ば過ぎ。そうすると今度今まで活動しなかったウナギも一気に動き出してそして入るようになる。そういうもんだよ。

[問答 77]

Q: 今やっているます網はどういった操業サイクルですか?

A: 朝3時半か4時頃から揚網開始。ウナギばかりが目的でない、モロゲエビとか。それを松江や宍道の間屋が来るのが遅くても朝5時半位。間屋も温泉旅館に納めるでしょう。持って帰ってから入れ物を入れ替えたりしたり、先方の都合に合わせないといけないから、遅くても6時までには来ないと。松江に帰るにも1時間かかる。それで7時、8時、9時までには納めないといけないということになるから、結局漁師が早く出ないといけない。

[問答 78]

Q: 朝3時半か4時には揚げて、持って帰って、船の中でも荒選別とかするんですか?

A: そうそう。船の中でも選別する。金になるものばかり入れれば苦労はしないが、ボラなんかは沢山入れば眼鏡が鱗だらけになる。

[問答 79]

Q: 毎日毎朝?

A: 毎日、日曜の朝だけ休みだ。揚げてみないと入ったか入ってないか分からないので、揚げてみて入ってなければ5時位には間屋に連絡いれて、今日はダメだぞとか言って。それでも、ほんのちょっと(の量)でも間屋が取りに来る。注文を受けた時には無いとは言えないだろう。普段なら(お客様1人に)3匹付けるものを1匹にしたりしてでも。モロゲは宍道湖七珍の中に入っているだもの。

[問答 80]

Q：金になるのは

A：モロゲにカワエビ。セイゴは金にならない。

[問答 81]

Q：ウナギ搔きはまだやっていますか？

A：やっていない。昔はやってしたが、鉄の平べったい帯でね、普通の包丁ぐらいな大きさのものに、針が打ってあって、これを木の柄にくくりつけて、これが1m位かな。これで泥の中を搔く。ほとんど泥の所。砂の所だとダメ。泥の層がある方が良く。そうするとウナギが引っかかる。この針に刺さる。ささって引っかけてあげる。カエシは無いが落ちない。これでみんな漁に出て捕った。刺さったら逃げるまで間が無い。ぼやぼやしていたらスーと泥の中

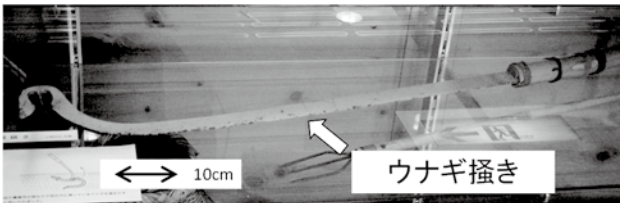


図 10. ウナギ搔き（写真は神戸川で使用されていたもの、2010年 ゴビウス企画展）

に入ってしまう。宍道湖でもやっていたのではないか（図10）。

[問答 82]

Q：刺さっても死なないもんですか

A：死なない。

[水産技術センター]：本日は長時間どうもありがとうございました。

謝辞

田中正人氏には、体調が優れない中、長時間の聞き取りに応じていただいた。また、本資料をまとめるにあたり、東京大学大学院新領域創成科学研究科の南里敬弘博士には大変有益な助言をいただいた。ここに記して心より感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 神西湖の自然編集委員会：神西湖の自然，たたら書房，米子市，1995.